新撰農業書

農學士中根壽編述

訂正 三

大日本教育會書籍館
三六函
二架
三五號
三冊
乙 G 3 681
1106
41
3

明治二十年四月六日内務省交付 3440

新撰農業書巻之三

農學士　中根壽　編述

果木栽培篇

第一章　總論

果樹を栽培して果實を收むるも、亦農家の事業の一なり、果實は人體の滋養になる液汁を含有すること頗る多きものにして、また食用品中の貴重なるものなり、○我が國は東北より西南に延び廣がりて、細長き邦なるが故に栽培すべき果木

の範圍も亦廣くして、暖帶果木も、寒帶果木も、共にその實を收むることを得るなり、○果木を繁殖せしむるには、果實を苗床にて育てあげて後、これを栽地に移し植うることあり、又插木、接木、接芽、採木、接根などゝ稱ふる、諸種の方法ありて、果木の性質、土地の適否、氣候の寒暖等に從ひて、此等の法を用ふるときは、その繁殖すること甚だ速なり、

插木の法とは、蕃殖せしめんと欲する、果木の强壯なる新條を切り取り、地中に孔を穿ちて、之を差し込むを云ふ、この法は、果木を增殖するには、最も單一なる法にして、その差し込みたる新條は、地中の濕氣の補助を得て芽を發し、且つ小さき葉を生じて、空氣の中より養分を吸ひ取りて生長す、之に依りて新條も亦地中に根を生じて、其養料を取るが故に、自ら一個の果木と成りて、美良なる果實を結ぶことを得るなり、但し插木太くして且つ强きときは、其成長も速にして、果實を結ぶの時期も、亦頗る早きがゆゑに、强壯なる新條を選びて切り取ること肝要なり、○插木と

なすべき新條を取りて之を挿むには、秋冬ともに適候なれども、若し木質堅からずして、寒氣の爲めに害せらるゝの恐あるか、又は土地に水氣多くして冬に至り地水凍りて、土地脹れあがるの患あるときは、これを温にして、濕ある場所に圍み置き、翌春霜害の患なき時に至り、之を取り出して地中に挿むべし、而して其の切り取たる新條は、三分の二程も深く土中に差し込みて、能く近傍の土を踏み固め、以て樹液の乾くを防ぎ、尚ほ肥糞樹葉或は苔等を其側に置きて、勢氣の減ぜざる様に注意すべし、

接木の法と挿木の法とは、道理に於ては異なる所なけれども、只挿木は、新條を地中に挿植し、接木は砧木(ダイギ)に挿植するの別あるのみ、○接梢を砧木(ダイギ)に挿植するときは、樹液循環して異種の梢も之が爲めに生長して果實を結ぶに至るなり、但し接木をなすには、砧木も接梢も、共に木質強くして損傷なきものを選び用ふるを肝要とす、○接木の法には、種々あれども、其中最も通常なるは、二法なり第一の法は、砧木と接梢とを、鋭き小

刀を以て斜に切り、其切り口を再び縦に切り下げて、接梢と砧木とを互に箝め込むなり、第二の法は、來接と稱ふるものにて、砧木を横切になし、其中央より縦に裂き、又接梢の末端の兩面を斜に殺ぎて、之を砧木に挿し込むなり、○凡て樹液の循環は、皮と材質との間に在るが故に、接木を爲すときは、能く此理を考へて、接梢の皮と砧木の皮と相密接せしめて、接梢と砧木の液汁をして、自由に環流せしむること肝要なり、而して既に接木し終らば蠟を用ひて接ぎ目に塗り附くべし、○右の第一の法は、接梢も砧木も、其の太さの稍同じきものを用ふるに宜しく、第二の法は太き砧木に接木するに宜し、凡て接梢は、秋冬の中に切り置きて春に至りて接木すべし、

接芽とは、一の果木より新芽を取り來りて、之を他の果木に植附くるを云ふ、其の法は先づ小刀を以て勢強き果木の芽を皮と少しの質とを附けて切り取り、これを植ゑ附くべき本木の皮を、丁の字形に截り剝ぎて、之を植ゑ込み、其の剝ぎ置きたる皮を以て之を覆ひ、柔軟なる藁を以て

新芽の周圍を縛り置き、その後蘖を除き去りて、芽を距ること凡そ二寸斗の上の處より本木を切りて、その勢氣を悉く新芽の方に注がしむる樣にすべし、○接芽の法は、夏期樹液の循環の盛んなる時を以て施すを好しとす、而してこの法は挿木よりも尚ほ單一にして、其効を奏すること易く、且つ一回接ぎ損ずとも、再び接ぎ替ふることを得るを以て、大に利益ありとす、

採木の法とは、小き果木に施す法にして、まづ横枝の低きものを曲げて、地上に溝を掘り、之を此溝の中に入れ、土を覆ひて根を生ぜしめ、然る後に之を切り離して、別々の果木となして、植替ふることを云ふ、○この法は、秋間强健なる枝を選びて行ふを好しとす、但しこれを行ふには、兩手を以て枝を曲げ、これを地中に埋めて、堅く地を踏み附け、かつ股木を挿し置きて、其元に復するを防ぐべし、

接根とは、接木と同一の方法にて、梢を根に接ぐを云ふ、その法は秋の中に根は三寸梢は五寸位に切り置きて、冬期家屋の中にて之を接ぎ、春早

く之を地中に植うるなり、凡て果木を栽培するには、善く土質を撿査して、乾きて輕く、肥沃にして深く、且つ排水法の自然に行き届きたる土地を選ぶを必要とす、泥炭質又は海綿様の土地は、最も柔軟なる果木に害あり、蓋し此の如き土質は、日中は陽熱地中に徹し易く、また夜に入りては、消散し易くして、寒熱の變頗る急なるを以てなり、○果樹に施用する肥料は、一體に廐肥或は泥炭、樹葉類を木灰或は骨粉等に混和し、下層犂を用ひて、一尺以上の深さに掘り起し、十分に之を土に混して、耙耨を以て細に碎きたる後に植うるときは、大概の果木は、能く發育成長するものなり、○果木の栽培には、地形を監察することも、亦要用なりとす、蓋し堅强なる果木は、地質と育樹の法とを得るときは、十分の好結果を得べけれども、軟弱なる果木に至りては、よく地形を吟味せざれば、寒氣或は霜露の害を被りて、大なる損耗を速くことあり、乃ち山間の低地は、高き所よりも夜霜の害をうけ易きがゆゑに、高燥なる地所を選びて栽うべし、

又冬期烈寒の強風に當れる處には、檜松等の如く、年中青葉の絶えざる樹木を並植して、之を防ぐを善しとす、

種子を苗地に育てたるときは、果木の種類に依りて、早晩之を移し植ゑざる可からず、凡て樹木の根の長さは、其の地上に出でたる高さと、概ね相均しきものにして、例へば、五尺の長さある果木なれば、五尺の根を四方に延ばし、二間の長さあるものなれば、其根も亦二間の長さにて、四方に蔓延するものなり、而して此樹根の極めて細微なるものまでも、其儘掘り起して移し植うることを得ば、移植に依りて、生長を停止するの患は甚だ少きことなれども、極微の根までも、切斷することなくして移し植うるは甚だ難き事なれば、先づ果木を移し植うるときは成丈け細微なるものまで掘り起す樣に心掛べし、○樹木を移し植ゑて、往々其枯死するあるを見て、人或は怪むものあれども、其死せる樹木の根は、これを移し植うるときに、甚しく切斷せられたるを見ば、其疑も忽ち氷解すべし、蓋し樹木を移し植う

多き地は開て之を耕種すへし其法略ほ蘭と同様なり葎草ハ其雌花を乾燥して麥酒を造るに必ず用ひ又た麵包を製するに加ふ之を培養する畑ハ砂交りの粘土にて春分の頃に小根を植へ其成長したるときハ竹を立て之に纏はしむ秋分の頃に花を摘み後直ちに堆糞を施すべし宿根草なれバ馬鈴薯などを間作すへし雄草雌草と地を隔て植うること肝要なり

甘蔗ハ南に向ひたる海濱の砂地に適す前年圃に置きし茎を春分に取り出し三節つゝに剪り分けて畑に挿し葉にて覆ふ後ち之を除て糞汁を施し霜降前に茎を刈り之を絞りて汁を採り煎熬て砂糖となす

近年舶来せし蘆粟ハ止た砂糖を得るのみならず黍の如く實を結び人畜の食料に佳なり且つ茎の絞糟を筵に製し穗ハ箒に作るに宜し舶来の琥珀甘蔗も仍ほ此蘆粟の一種なり

胡麻ハ白黒赤の三種とし清明の頃降雨の後に砂交りの沃土に播き焼肥堆糞等を肥

料とす油を採り又た豆腐の如くにし油糟は家畜の食とす

落花生は蔓草にて地上に匍匐して根を生し地中に入て実を結ぶ実の殻灰は繭形をなし其の中に実を具ふ甘藷に適なる畑を撰み穀雨の前に種子を下し灰を和したる糞汁を注ぎ時々雑草を除くべし収期は霜降の前にして上作の年は一段より十石餘を採り得べし用法は炒て食し豆腐の如くに製造し又た絞りて食油を採るに色味質とも佳なり

荏蘇は其実油多く製造薬用食料に適し又た糟は肥料に宜し適地および培養は玉蜀黍を見合すべし

茶は天然生を極品とし養ひしものは之に亜ぐ種子は霜降の前に採り之を立冬の頃に下すは発芽を芒種の頃にして地は軟黒を佳なりとす時々草を除き地を和け乾鰯糞汁を肥料となすべし芽を摘むは

歟雨の後にて、茶の製法は數種ありて、本色茶在来通常の茶は蒸して炒り、紅茶は蒸さずして生葉を炒り、磚茶は製茶の粉屑を以て固めて磚の如に製す

桑は其種類によりて、芽を萌すの早晩あり、養蚕をなす人は先つこゝに注意すへし、乃ち市平は早桑にて、十文字は晩桑等の如きなり、桑は實植接條、挿條とも、皆な適するものなれとも、就中傘捄りとて、幹より枝を四方に曲け、壓條にするを第一とす、畑は砂交りの沃土にて、多濕の處を宜しとす、日光および空氣の通過を能くすること肝要なれは、昔は一段に千本を作りしか、今は六百本を適度とせり、肥料は酒糟、油糟、または人糞を多く用ひ、移植は秋末を通常とす、

楮は皮にて紙を製す、有益の植物なり、地の瘠薄、砂磧を問はす、能く成長するものにして、且つ培養甚た易すし、實植、壓條、株分皆な蕃殖の法にして、殊に根吹を宜しとす、肥料

K110.6
17
2.

も一年に一度つゝ、堆糞または焼糞を用ゐ、冬末に幹を刈り、湯蒸にして皮を剥き乾燥して抄紙の料とす、又た結香雁皮桑皮なとも、共に皮を抄紙に供す、

漆樹ハ漆を製して器物を塗り、又た實より蠟を製す、此樹も實植、接條とも容易く繁殖せしむへし、共もに穀雨に施こすなり、漆を採るには幹を傷け、是より木汁を掻き取るなり、其候大約大暑より秋分の後までとす、實を結ぶは雌木にして、結はさるを雄木と知るへし、

植るハ沙交りの真土に植へ、必す接條をなすを良しとす、肥料ハ諸種の動物肥料、又ハ醤油糟を施すへし、松山種ハ實大なり、されと收量少きが故に、近ろ多く栽種するハ、大いきゐ小いきゐ等なり

農學讀本巻之一　終